第二章　戦後中国人留日学生団体と日本共産党・中国共産党——中国留日同学総会執行部と日共中国人細胞（支部）の関係を中心に[1]

荒川　雪

はじめに

連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領方針により、日本と外国との間の人、物質、資本の移動は、連合国軍最高司令官（SCAP）の許可を得たもののみに制限された。外国為替取引も例外ではなく、外国から日本への銀行送金は極めて困難になった[2]。祖国の政府や家族からの金銭的支援が滞ったため、中国人留日学生、台湾出身の学生の生活は困窮した[3]。

こうした状況を受け、中国大陸及び台湾出身の華僑や学生の団体が終戦直後から日本各地で乱立した。そして一九四六年五月には、中華民国留日同学総会（一九四九年九月に中国留日同学総会に改称、以下、同学総会）が台湾出身者を含む中国人留日学生の統一団体として設立されたのである。同学総会の設立には、一九四六年に来日した中華民国政府（以下、国府）駐日代表団（以下、駐日代表団）の指導があったと指摘されている[4]。GHQ占領下の日本では、物質が不足し配給制を実施していたが、連合国の国民に対しては特別配給で優遇した。同学総会は、会員がこうした優遇を得るために、GHQ、国府や駐日代表団と良好な関係を構築する必要があり、指導を受け入れた可能性が高い。筆者が行った同学総会の機関紙『中国留日学生報』[5]（以下、『学生報』）の記事の思想傾向に関する研究では、一九四七年に掲載された「親中共」及び「親共産主義」と分類された記事は、それぞれ全体の二・〇％と〇・八％に留まり、「親国府」の五・九％に及ばなかった。

ところが、一九四八年には「親中共」の記事が「親国府」の記事数を大きく上回り、一九四九年には四七・四％で全体の半分近くを占める一方、「親国府」の記事はゼロになり、GHQや国府、日本政府を批判する記事の増加が確認された。『学生報』が共産主義イデオロギー色の強い新聞へと転じた背景には、中国共産党（以下、中共）と日本共産党（以下、日共）の合意により、日共内の秘密組織として一九四八年六月に発足した日共中国人細胞（細胞＝支部）の指導があったことも筆者の研究で明らかとなった[6]。この日共中国人細胞（支部）の中国人留日学生の主なメンバーは、東京大学や第一高等学校（以下、一高）などの名門校の出身者と在学生であった。朝鮮戦争開始後、日共の活動が制限されると、同学総会は中共の指導を直

接受けるようになり、一九五五年まで中華人民共和国（以下、中国）政府（以下、人民政府）の対日工作拠点としての役割を担った。[7]

中共と日共による中国人留日学生（以下、留日学生）への指導の実態については、これまで資料の制約から殆ど解明されてこなかった。しかし最近になって、この制約要因が解消へと向かい、研究環境が改善している。日共と同学総会をめぐっては、日共の中に留日学生を指導するための組織があったとされるものの、二〇一五年までは推測の域を出なかった。研究が進まなかった理由として、中共と日共の間でこの組織及び留日学生・在日華僑への指導内容は最高レベルの秘密事項にするとの密約が交わされ、史料の公開や証言などができなかったことが挙げられる。ところが、日共党員として同学総会の指導に関わり、中国の工作員でもあった郭承敏の回想録『ある台湾人の数奇な生涯』が二〇一四年八月に日本の出版社から刊行されたことで状況は一変した。郭承敏は同書において、日共による同学総会への指導があったと明言したのである。さらに、中共と日共の合意に基づく秘密組織として、同学総会などを指導する日共中国人細胞（支部）が一九四八年六月に発足したことも明かしている。郭承敏は一高在学中に日共に入党した留日学生の一人であり、同学総会の元執行部委員であった。同学総会の元主席であり、日共及び中共党員として中国政府の情報関連工作に関わった郭平坦も、この出版を機に、中共の機密管理部門は、日共が同学総会や華僑総会を指導した件を機密事項から外したと、筆者のインタビューに対して証言した。郭平坦は、日共の中国人細胞（支部）に深く関わった立場から、郭承敏の回想録に書かれた同学総会と日共の関係は概ね事実であり、一九五五年までの同学総会の主席は全員日共党員であったとも語っている。[8]

先行研究では、戦後の在日中国人留学生の左傾化の主因は、二・二八事件による台湾出身留学生や知識人の転向や内戦での中共の勝利によるものとされてきた。[9] しかし、郭承敏の回想録の出版後、一九四八年六月に日共中央規律検査委員会の下で設置された秘密中国人細胞（支部）を指導した日共・中共党員楊春松の子息をはじめ、関係者がインタビューに応じ、回顧録を出すなど、先行研究時になかった動きが活発化している。そこで、本章は同学総会の会員名簿や『学生報』に掲載された執行部メンバーの名簿、関係者の回想録及び筆者が行った関係者へのインタビュー調査などを通じて、同学総会の執行部委員、会員の構成が変化した過程、そして日共内に極秘に作られた在日中国人日共党員の組織、中共及び中国政府と同学総会の関係を明らかにする。

一　戦後留日学生・華僑の団体の乱立と統合過程

一九四五年八月十五日の日中戦争の終結を境に、当時日本で暮らしていた留日学生・華僑の生活は、大きく変化した。川島真の研究によると、日中戦争の開戦によって中国人留学生が大量に帰国する一方、東北の満州国、汪精衛政権といった傀儡政権から日本に相当な規模の留学生が派遣された。日本の植民地であった台湾からは、学生が国内進学の形で日本の大学に入学する事例が相次いだ。[10] 学生に限らず、台湾人の流入は一九二〇年代から一九四〇年代にかけて急増した。[11] 結果、日中戦争終結時に、日本には数多くの中国人が滞在していた。一九四六年三月十八日の時点で在日中国人総数三万八四七人の内、台湾籍が一万五九〇六人という調査結果、[12] 一九四九年以後も二万から四万人程度の中国人が日本に滞在していたという記述などは、その根拠になろう。[13]

日中戦争中、日本で暮らしていた留日学生・華僑は、多くの差別を受けた。戦争が終わると、日本は深刻な物不足に陥り、食料品など多くの物質で配給制を実施したため、彼らはGHQと日本政府からの配給のみで生活しなければならなかった。さらに、SCAPの送金制限により、中国大陸や台湾から来日した留日学生の多くは、元の派遣政府や機関、家族からの送金が途絶えた。このような厳しい環境下で自らの生活・利益を守るため、一九四五年の日本の敗戦以降、戦時中に解体された中国人留日学生・華僑の団体の再建、新組織の結成の動きが活発化したのである。

台湾籍の華僑及び学生はもともと、「日本帝国臣民」の身分を有していたため、戦争期間中、大陸出身の華僑や留学生と比べれば若干恵まれていた。しかし、日本の敗戦によって境遇は逆転した。本来であれば、台湾人は中華民国国民の身分を回復し、戦勝国民となったことで、GHQによる特別配給等の優遇を受けられる立場になるはずであった。ところが、台湾籍の留日学生は、終戦直後の日本の政策により、中華民国の国籍を持つ人とみなされなかったため、配給などの面で日本人よりも冷遇された。また、台湾が五〇年間日本の植民地であったことを鑑み、国府は、留学生を含む台湾籍人への「中国人化」教育が必要と考えた。[14]

国府のこうした態度は、台湾籍の留日学生・華僑に、自身の中国人としての身分及び愛国心をより明確に示したいという感情を喚起させた。台湾籍留日学生・華僑を結び付け、留学生・華僑組織をいち早く立ち上げさせる重要な要因ともなった。一九四五年八月の日本の敗戦後、台湾系華僑は各地で団体を設立し始めたが、団体間で設立準備や組織運営面に関する協調や連携の動きはみられなかった。そのため、同年

九月の東京には「台湾同郷会」が二つ存在し、いずれも在日台湾人の生活や帰国に関する問題の解決を目的に掲げた。[15] 同じ頃、中国大陸系の華僑組織は、特高による抑圧から解放され、各地で発足あるいは再建された。一九四五年一〇月に結成された神戸華僑総会に続き、東京、横浜、大阪など全国で組織を結成した。これらの団体の役割は、主に華僑の会員登録と会員名簿の作成、日本政府に対する生活物質の提供要求及び中国人僑民への配付であった。[16]

台湾人同郷会の組織化が徐々に進んだ一九四六年、一部の同郷会の幹部は、同胞の利益を守るためには華僑団体の統一が不可欠と考えるようになり、台湾同郷会は大陸籍華僑団体との合併問題を検討し始めた。[17] 東京華僑連合会と台湾同郷会はそれぞれ代表を各地に派遣し、地方の華僑組織の同意を得たうえで、全国レベルの華僑統一組織である中華民国留日華僑総会（以下、華僑総会）の成立大会が同年四月に熱海で開催された。大会決議に基づき、都道府県にあった華僑組織は合併し、華僑総会の下部団体、すなわち「華僑連合会」として活動することになった。やがて、華僑総会はすべての在日本華僑及び留日学生を代表する組織へと発展し、一九四七年当時の指導部は、日本各地の華僑連合会と中国留日学生組織の幹部八〇人から構成された。[18] 華僑総会の設立後、日本国内で暮らしていた台湾人の大部分は、地方の華僑連合会に入会した。[19] こうして、華僑総会は留日華僑全体を代表し、日本政府、GHQ及び国府の駐日代表団との交渉役を担うようになったのである。[20]

留日学生の団体も、華僑団体と同様、台湾の学生による結成が先行した。[21] 一九四五年八月の日本の敗戦後、台湾華僑による台湾同郷会の発足と同時に、台湾出身の学生を中心とする台湾学生会が結成された。[22] また、一〇月二八日には、台湾学生聯盟が東京女子大学の講堂で成立大会を開催し、第一期執行委員長として羅豫龍が選ばれ、翌年春に行われた第二期執行委員選挙も羅が再び選出された。何義麟の調査によると、台湾学生聯盟だけで会員数は当時約二〇〇〇名に達していた。他方、東京地域の中国大陸出身の留日学生は、一九四五年一一月二六日に東京の中華青年会館で第一届留日学生大会を開催し、その執行委員として高維先、林潮海、林連徳、王毓声、范琦など一七名を選出、高維先は主席にも選ばれた。十二月一六日には、組織の正式名称を「中華民国留日東京同学会」（以下、東京同学会）とした。[23] 東京同学会の発足後、北海道、盛岡、仙台、横浜、京都、大阪、神戸、福岡、長崎にも同学会が設立された。一九四六年一月、東京同学会は幹部構成に関して、台湾学生聯盟という台湾人学生組織の中から副代表を選ぶことを決定した。[24] これが日本全国の大陸系及び台湾系留日学生団体の統合に向けた第一歩となった。その後、東京同学会を

中心に、全国の大陸系及び台湾系の同学会組織が共同で中華民国留日同学総会（同学総会）を発足させた。一九四六年五月二二日の同学総会設立大会では、東京同学会の主席を当時務めていた博定を主席に、台湾学生聯盟の委員長を務めていた羅豫龍を副主席に選出すると同時に、機関紙『学生報』の発刊を決定した[25]。田中剛によると、全国レベルの大陸系と台湾系の華僑と留日学生の統合組織である華僑総会及び同学総会の成立は、駐日代表団の指導の下で行われた[26]。

二　同学総会の設立と執行部の構成

一九四六年九月一日に完成した『中華民国留日学生名簿』によると、同学総会の当時の会員数は一〇五二名、そのうち大陸出身者が四二八名（三七・二一％）、台湾出身者は七二四名（六八・二一％）であった[27]。そのため、留日学生の全国組織として発足した同学総会は、中国大陸や台湾など、出身地の異なる会員間の言語コミュニーケーションの問題に直面した。元同学総会主席の林連徳の回想によると、大陸出身者の国語（北京語）のレベルは比較的に高いものの、日本語のレベルが低い。台湾の学生は日本語と台湾語に優れているが、国語のレベルは劣っている。華僑学生は日本語と出身地（広東、福建、江蘇、浙江など）の言語レベルは高い半面、国語のレベルが低い。こうした状況下、台湾が中国へ返還され、台湾学生や華僑学生は国語学習の重要性を徐々に認識し始めた。留日学生の間で、国語を勉強するための学習班が次第に組織され、多くの台湾学生や華僑学生が国語を勉強するようになった[28]。当然ながら、国語を教えるのは大陸出身の留学生であった。大陸出身の学生は人数的には少数派であったものの、教師という立場で尊敬されていた。そのため、学生団体の統合過程において、大陸出身の学生が大きな役割を果たしたとされる[29]。

図1と図2は、一九四六年九月一日に同学総会が作成した『中華民国留日学生名簿』の最後に添付資料として掲載された第一期及び第二期の執行部の組織図の名簿に、筆者が同名簿に掲載された所属先の学校名を追加したものである。同学総会に関する研究は、これまで主に『学生報』を利用して行われた。しかし、『学生報』は一九四七年一月に創刊されたが、創刊号とその翌月に発行された第二号は発見されず、筆者を含む研究者は、同学総会設立当初の状況について詳しく分析することができなかった。一方、東洋文庫所蔵の『中華民国留日学生名簿』には、同学総会が作成した一九四六年九月一日段階の会員名簿と第一期（一九四六年五月～一〇月）、第二期（一九四六年十一月～一九四七年三月）の執行部の組織図が含まれている。そこで本章は、これらの資料を用いて同学総会設立当初の幹部構成、そして大陸出身と台湾出身の会員間の関係

分析を試みたい。

図1に示したように、第一期執行部は全部で二二名いた。出身地別では、大陸出身者が博定（北平）、周元賓（山東）、張履（浙江）、温士琨（天津）、趙文超（遼寧）、王振環（河北）、趙樹勲（北平）、李樹本（安徽）、王瀛（四川）、王鳳鳴（江蘇）、陳鴻群（河北）、余灼松（広東）の十二名、台湾出身者は羅豫龍（新竹）、林良立（台南）、張三儀（台北）、頼民基（新竹）、王瑞興（高雄）、周神祐（台中）、蔡慶播（台中）、李子聡（台中）、林順三（高雄）、呂震義（台北）の一〇名となっている。[30]

執行部の構成は大陸出身者五四・五％、台湾出身者は四五・五％と、大陸出身者が三七・二％、台湾出身者が六二・八％を占めた会員構成と比例していない。主席の博定、総務部、外交部、文化部、生活部の四つの部長は（周元賓、趙樹勲、王瀛、余灼松）はいずれも大陸出身であった。さらに、東京同学会以外の地方同学会の代表として事務科の業務を担った温士琨（京都帝国大学）、趙文超（東北帝国大学）も二名とも大陸出身であった。以上の点から、同学総会第一期執行部の主要メンバーは大陸出身者で旧帝国大学や国立大学、一高などの名門大学、旧制高等学校の在学生が多くを占め、台湾出身の委員は具体的な業務を担当する補佐役に回ったと言える。

地方同学会の代表が入っていることは、同学総会の第一期執行部の大きな特徴の一つであった。これは、同学総会が設立当初、留日学生の全国組織として、東京だけではなく、地方の同学会組織との連携を図ることを強く意識して、執行部の人事を行ったためと考えられる。

設立当初、同学総会は第一部（東京同学会）と第二部（台湾学生聯盟）に分かれ、一体的な活動を行うことが困難であった。大陸出身者が第一期執行部の重要ポストを占めたことが主因と見られるが、他の原因も考えられる。台湾学生聯盟第一期連絡部長であった呉修竹は、二つの組織の統合当時の状況について、「統一のための双方の代表者らによる会議は四六年の五月ではなかったかと思う。等々力の「中華青年会館」で前後一二時間にわたるマラソン会議が開かれた。今にして思えば、一二時間を費やしたのも無理はなかった。双方の考え方が全く違っていたのである。台湾側は合理主義の洗礼を既に受けている。一方、大陸側はM・ウェーバーの表現を借りれば、いまだにツァウベル・ガルテン（魔法の国、Zabel Garten）の住人なのだ！」と述べ、大陸側に対する台湾側の優越意識が統合のネックになっていた可能性を示唆した。

にもかかわらず、二つの団体の組織の活動が実質的な統合に至ったことについて、呉は当時の東京同学会主席であり、同学総会初代主席であった博定を抜きには語れないと回想録で語った。[31] 博定は一九二三年に北京生まれのモンゴル族で、幼少期に家族と共に来日し、一高を経て東京大学医学部に進

図1　中華民国留日同学総会第一期執行部の組織図

- 主席　博定（東京帝国大）
- 副主席　羅豫龍（早稲田大）
- 総務部　部長　周元賓（東京産業大）
  - 事務科　張履（日本大）
  - 林良立（日本大）
  - 温士琨（京都帝国大）
  - 会計科　趙文超（東北帝国大）
  - 張三儀（東京産業大）
  - 文牘科　周元賓（東京帝国大）
  - 王振環（東京帝国大）
  - 賴民基（一高）
- 外交部　部長　趙樹勲（東京帝国大）
  - 趙樹勲（東京帝国大）
  - 王瑞興（明治学院専）
  - 李樹本（一高）
- 文化部　部長　周神祐（横浜工業専）
  - 学術科　王　瀛（千葉医科大）
  - 蔡慶播（早稲田大）
  - 王鳳鳴（東京帝国大）
  - 出版科　陳鴻群（一高）
  - 李子聡（青山学院専）
  - 宣伝科　林順三（中央大専門部）
  - 余灼松（東工大予備部）
- 生活部　部長　呂震義（一高）

注記一：『中華民国留日学生名簿』一三四頁の執行部名簿は氏名の一部に記入ミス（羅豫龍、王瑞興、周神祐、陳鴻群）があり、同名簿の所属先学校欄と『学生報』の掲載記事に基づき、訂正した。

注記二：所属先は『中華民国留日学生名簿』の掲載情報に基づき、筆者が追加記入した。

出　典：『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）一三四頁（東洋文庫所蔵）。

学、医学博士まで取得した人物である。一九四六年五月から一〇月まで同学総会の初代主席を務めた後、一九四七年に華僑総会副会長に選出された経歴を持つ。戦後から一九五〇年代半ばにかけて医学を学び、医療関係の仕事に従事しながら、留日学生、華僑の生活改善の活動に尽力した。呉によると、博定は「語学は天才といって良く、考え方が台湾側と通ずるものを持っていた」ため、第一期の同学総会主席に推されたという。[32] 博定自身が『学生報』の同学総会成立一〇周年記念として掲載された回想文の中で、成立直後の同学総会が大陸系と台湾系の二つの留日学生の組織が分かれて活動し、それを是正して実質的に統合した時の苦労話を書いている。[33]

同学総会の執行部の重要ポストが大陸出身者によって占める状況は、第二期の執行委員選出時に改善された。図2は、同学総会第二期（一九四六年十一月～一九四七年三月）執行部の組織図である。図2の通り、第二期執行委員は全部で三三名いた。

第二期執行部委員を出身地別で見ると、大陸出身者は趙樹勲（北平）、黄廣成（広東）、烏勒吉胡（熱河）、曽照栄（広東）、張国権（広東）、王瀛（四川）、呉康南（広東）、呉紀華（広東）、王兆元（河北）、王梓安（江蘇）、陳隆深（広東）、李玉綱（安東）、李樹本（安徽）、呉微（河北）、董振亜（遼寧）、孫厚蓬（遼寧）の一六名である。一方、台湾出身者は羅豫龍（新竹）、林登階（台中）、廖運啓（新竹）、戴国瑞（新竹）、邱哲聡（台南）、蔡錦聡（台

図2　中華民国留日同総会第二期執行部の組織図

- 主席　趙樹勲（東京工業大）
- 副主席　羅豫龍（早稲田大）
- 総務部
  - 部長　黄廣成（慶応義塾大）
  - 副部長　林登階（明治薬学専）
  - 事務科　廖運啓（青山学院専）
    - 鳥勒吉胡（日本大）
    - 曾照栄（慶応義塾大）
    - 戴国瑞（青山学院専）
    - 張国権（東京工業大）
    - 邱哲聡（順天堂医学専）
  - 文書科
    - 蔡錦聡（中央大専）
    - 王　瀛（千葉医科大）
    - 張三儀（東京産業大）
    - 呉康南（慶応義塾大）
    - 賴中和（中央大）
    - 呉紀華（鳥取農業専）
    - 潘廼禄（東京医学専）
- 会計部
  - 部長　王兆元（一高）
  - 副部長　王梓安（一高）
  - 副部長　蔡慶播（早稲田大）
- 組織部
  - 部長　陳尊芳（一高）
  - 副部長　呉文雄（中央大）
  - 王　瀛（上智大専）
  - 出版科　李玉綱（東京工業大予備部）
  - 学術科　樂錦鍠（東京帝国大）
  - 体育科　王克智　林振徳（研数専）
- 文化部
  - 部長　李樹本（一高）
  - 副部長　王瑞興（明治学院専）
  - 呉　微（東京医科大）
  - 芸術科　董振亜（東京農林専）
- 外交部
  - 部長　孫厚蓬（東京工業大）
  - 副部長　林廷引（専修大専）
- 生活部
  - 部長
  - 副部長

注記一：所属先は『中華民国留日学生名簿』の掲載情報に基づき、筆者が追加記入。

出　典：『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）一三九―一四〇頁（東洋文庫所蔵）。

南）、張三儀（台北）、賴中和（台中）、潘廼禄（台中）、蔡慶播（台中）、陳尊芳（新竹）、呉文雄（台南）、樂錦鍠（台南）、林振徳（台南）、王瑞興（高雄）、林廷引（高雄）の十六名である。[34] 共に一六名で、半分ずつの構成になっている（出身地不明の王克智を除く三二人）。

第二期では組織部と会計部が設置され、執行部内組織は四部門から六部門に増加した。各部には新たに副部長職を置き、業務担当の人員増も図られた。その際、一九四六年一一月時点の同学総会は、組織の健全化、第一部と第二部に分かれて活動する状態の是正、そして台湾側の不満の緩和に向け、台湾出身者を執行部に多く登用した。さらに、主席大陸出身者、副主席は台湾出身者で分け合うだけでなく、各部の部長も、大陸出身者が総務部部長黄廣成、外交部部長李樹本、生活部部長孫厚蓬の三名、台湾出身者が組織部部長蔡錦聡、会計部部長張三儀、文化部部長潘廼禄の三名と、半々にした。さらに、各部の副部長職も、大陸出身者が組織部副部長王瀛、会計部副部長呉康南、文化部副部長王兆元、台湾出身者が総務部副部長林登階、外交部副部長王瑞興、生活部副部長林廷引の三名の半々としたうえ、各部の部長と副部長が必ず大陸出身者と台湾出身者のペアになるようにした。この第二期の執行部の構成から、第一期の執行部のように、大陸出身者が主要ポストを独占し、台湾出身者は補佐役という不公平は解消されたと言える。これも、大陸出身者によって結成された第

一部と台湾出身者によって結成された第二部に分かれていた同学総会が実質的な統合に至った証拠に挙げられよう。大陸出身者の組織と台湾出身者の組織の活動が実質的に統合したもう一つの証拠として挙げられるのは、台湾学生聯盟の機関誌である『龍舌蘭』と東京同学会の機関誌である『白日旗』が同学総会の機関紙である『中華民国留日学生旬報』（『学生報』）の創刊をきっかけに廃刊したことである。[35]

これらの分析から、第二期執行部人事は、第一部と第二部の統合による組織の健全化が最大の目的であったと評価できる。一方、この時期の同学総会の活動に日共が関与した証拠は見つかっていないため、この人事は日共などの指導を受けてのものではなく、幹部達が自主的に決めた可能性が高い。

三　日共在日中国人細胞（支部）と同学総会

『中華民国留日学生名簿』には、第一期と第二期の執行部組織図しか掲載されていない。以下では、『学生報』に掲載された情報と同学総会の元会員の回想録に基づき、第三期以降の同学総会執行部を図示し、各期の構成を分析する。分析の前に、第三期の執行部が始動する前後の日共について状況を確認しておきたい。

日共は戦前・戦中と日本政府によって弾圧され、幹部の多くは逮捕・収監されたが、GHQの指示で一九四五年一〇月に彼らは釈放された。海外に亡命した幹部も日本に戻り、日共は国内各地で政治活動を再開していた。中央に統制委員会、中央委員会、全国協議会を置くと同時に、地方には地方委員会、地方党会議、地区委員会などを設置し、地区委員会の下に細胞郡委員会、細胞（支部）を置いた。とくに、日本全国のほとんどの大学や高校には細胞（支部）が設けられ、終戦直後の日共は、高等教育機関でも活発な活動を行っていたのである。[36]

一高日共細胞（支部）に一九四八年四月に入党した郭承敏の回想によれば、一九四八年四月当時、一高細胞にはすでに二十数人が所属していた。そのうち、中国人は一高在校生の崔士彦と陳文貴の二人がいた。一九四六年九月刊行の『中華民国留日学生名簿』には、崔士彦は一高の学生と記載されていたが、陳文貴は一九四六年九月時点では中央大学専門部に在籍していた。[37]また、郭承敏の回想によれば、陳文貴は台湾出身の学生で、終戦直後から日共の活動に関わり、一高細胞に入ってからオルグとして学校細胞を回っていたという。[38]一高同窓会『会員名簿』によれば、陳文貴は郭承敏と同じ昭和二五年（一九五〇年）に一高を卒業しており、陳が一高に入学したのは一九四七年四月と見られる。[39]陳文貴は一九四六年に同学総会に入ったため、同会の設立当初から日共党員がすでに在籍していた可能性がある。

また、日共と中共の連絡は、当時両方の党員であった楊春松が担当した。日共と同学総会をめぐっては、当時日共党員であり、後に中国の工作員になった郭承敏が回想録『ある台湾人の数奇な生涯』の中で、日共による同学総会と華僑総会への指導はあったと明言した。さらに、中共と日共の合意に基づく秘密組織として、同学総会などを指導する部署が一九四八年六月に発足したことも明かしている。

雨が上がった六月のある日、崔士彦から大事な会合があるから、小田急線新宿駅のホームで待ち合わせようという話があった。呂永和ら何人かで連れ立って、崔君に案内されたのは成城学園前の静かな高級住宅街に建つ瀟洒な洋館であった。集まったのは十二、三人だったか。五七年も前のことで思い出せる主なメンバーは、崔士彦、陳文貴、呂永和（早稲田露文科、河南）、林傑栄（東大卒、台湾）、頼鑾嬌（女、台湾、謝雪紅の秘書を一時務め、中共天津局の日本科では許淑英と名乗る）、黄永国（京大、広東、国民党駐日代表団勤務）、范琦（北京）、于長久（京大、大連）。もう一、二人いたかもしれないが……。（中略）まず先輩格の楊春松が、皆に岩本厳日共統制委員会委員を紹介した。そして「今日集まったのはすでに日本共産党に加入しているか、今日入党申込書を書いてもらう同志である。今中国革命はすばらしい勢いで進んでおり、われわれ中国人党員も新しい局面の新たな任務に直面している。中共中央と日共中央の合意によって、在日中国人党員は、今後、日共中央統制委員会の指導の下で華僑・留学生に対する啓蒙、組織工作を展開し、日本の民主勢力とも連帯の活動を行うこととなった」と趣旨をのべた。ついで岩本同志から、「諸君の党籍は今の所属からこの非合法組織に移る。このことについては中央から各細胞に通知が行く。この組織は秘密組織だが、活動は合法的に展開すると説明があった。[40]

元同学総会主席で、日共党員でもあった郭平坦は、郭承敏の回想録に書かれた同学総会と日共の関係は概ね事実であり、当時中国人日共党員はこの組織を「地下党」と呼んでいたと証言した。[41] ただし、日共中国人留学生、華僑支部の結成時期は事実と異なり、自らが中心となって編集した『中国留日同学総会二十年（一九四六―一九六六）』には一九四七年六月結成と記載しているとも述べた。結成の経緯及びその後の活動については、以下のように概説される。

抗日戦争勝利後の一九四五年末、当時の東京華僑連合会副会長の楊春松（台湾桃園出身、一九二八年に中共入党）は

東京を発ち、朝鮮半島経由で（中国）東北に入り、中共東北局書記の彭真と面会した。その後、当時八路軍（共産党軍）の支配下にあった張家口に到着し、中共海外工作委員会主任の朱徳に面会した。楊春松は組織（中共）に「日本にいる中国人は、留学生を含めて数万人にも上り、今後どうすればよろしいか」と指示を仰いだ。延安からの返事は、共産党の組織を作ることはできるが、日本の事情は、日共が最も詳しい。共産主義運動は国際性を持つものであるから、あなたたちは日共の領導（指導）に従うべきである。一九四六年四～五月、楊春松は往路と同じルートで東京に戻り、日共党員として日共中央に対して一連の面会内容を報告した。一九四七年六月、中共中央と日共中央は協議し、日共華僑支部を結成すること、それを日共中央規律検査委員会（統制委員会）に従属させることで合意した。（中国）国内の解放戦争の好転に伴い、日共華僑支部は目覚ましい発展を遂げ、メンバーは結成当初の十数人から、一年後には数十人に増加した。そこで、華僑支部とは別に、同学総会留学生支部及びその地方支部を設立した。これらを指導したのは、日共から派遣された特派員であった。

同学総会の共産党支部は一九四七年から一九五五年末の解散までの九年間、重大な役割を果たした。一九五一年から一九五二年の困難な時期において、圧力に屈することなく、組織を維持し、強い意思で愛国主義の旗印を掲げ、団結を維持した。組織として、同学総会は新中国を擁護し、中共革命の正しい路線を擁護することに貢献した。資料によると、この九年間の同学総会の主席一三名は全員共産党員であり、副主席の大半も共産党員であった。日本華僑留学生支部は当初、日共中央の指導を受けていたが、一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発後に日共中央が米国占領軍によって弾圧されて以降、中共中央が直接指導するようになった。国際情勢の変化に伴い、日共華僑留学生支部は中共中央の指示で一九五五年末に解散した。[42]

郭承敏の回想録と『中国留日同学総会二十年（一九四六―一九六六）』の日共華僑、留学生細胞（支部）の設立の経緯に関する説明は類似しているものの、設立時期は前者が一九四八年六月、後者が一九四七年六月で異なる。筆者は『学生報』の親中共姿勢に関する分析を通じて、郭承敏の一九四八年六月説の方が可能性は高いと判断した。[43] ただし、一九四七年から一九五五年までの九年間の同学総会の主席全員及び多くの副主席が日共党員であったとする『中国留日同学総会二十年（一九四六―一九六六）』の記述は信憑性が高い。その根拠とし

表1　中国留日同学総会歴任主席（1946-1960）

任期	時期	主席	副主席	副主席
第1期	1946.5	博　定	羅豫龍	
第2期	1946.11	趙樹勲	羅豫龍	
第3期	1947.4	范　琦	王毓声	呉修竹→頼中和
第4期	1947.9	范　琦	郭功凱	林瑞聡
第5期	1948.3	王毓声	李樹本	頼中和
第6期	1948.11	林連德	林傑栄	高銘智
第7期	1949.5	李桂山	張玉峰	陳文貴
第8期	1949.11	博　仁	陳文貴	崔士彦
第9期	1950.5	王兆元	洪山海	陳志堅
第10期	1950.12	韓慶愈	陳峰龍	陳秋旻
第11期	1951.7	陳峰龍	陳文貴	楊秀勇
第12期	1951.11	馬広秀	陳秋旻	
第13期	1952.5	劉璋温	蕭龍光	
第14期	1952.12	韓慶愈	蕭龍光	
第15期	1953.5	韓慶愈	郭平坦	劉俊南
第16期	1953.11	呂永和	凌憲民	郭平坦
第17期	1954.5	呂永和	劉俊南	何文健
第18期	1954.11	郭平坦	陳梁榕	何文健
第19期	1955.7	郭平坦	陳清源	何文健
第20期	1956.1	郭平坦	何乃昌	陳明新
第21期	1956.7	陳明新	羅輝雄	陳学全
第22期	1957.5	陳学全	邱茂	楊忠銀
第23期	1958.5	李国雄	楊忠銀	
第24期	1959.6	石嘉福	許義美	
第25期	1960.6	林伯貴	任政光	

注記：この名簿の名前の一部表記に誤記があり、また一部の役員の途中交代の情報が欠如されたため、筆者は『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、1946年9月1日）、『中国留日学生報』、呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史――呉修竹回想録』（彩流社、2018年）などの関係者の回想録に確認し、一部修正した。
出典：北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会20年》編輯部編『中国留日同学総会20年』（北京日本帰僑聯誼会、2015年）26頁。
備考：1. 第1期－第21期（1946-1956年）は任期半年、以降は任期1年。
2. 第17期以前は東京同学会主席、副主席は総会副主席が兼任。
3. 第18期から東京同学会の副主席は別に選ばれるが、主席は総会副主席が兼任する。

て、郭承敏の回想録にも、第三期の主席范琦が一九四八年六月の時点で日共党員であること、同じく第三期の副主席王毓声も日共党員であったとの記述があることが挙げられる。日共華僑、留学生細胞（支部）の成立が一九四八年であったとしても、同学総会の主席は一九四七年四月の第三期以降、いずれも日共党員であったことは間違いないであろう。[44]

表1は、同学総会の各期の主席と副主席の一覧である。『学生報』では詳細を確認できなかった一部の主席、副主席については表1を基に、第三期以降の執行部の構成について以下で分析したい。

第三期の執行部は一九四七年三月二三日の同学総会全体会議で選出され、主席には范琦（江

西出身、家族が北京在住、東大研究生）、副主席には東京同学会主席の王毓声（福建、一高）と副主席の呉修竹（台中、中央大）が就任したことを一九四七年三月三〇日発行の『学生報』第四号で知らせた。また、華僑会との合流に伴う執行部組織の見直しにより、同学総会は生活部の機能を縮小し、文化活動に一段と力を入れる方針も説明した。[45] ただし、この方針表明以外に、『学生報』第四号には、執行部に関する具体的な説明は掲載されていない。その後、五月一五日発行の『学生報』第五号は、許燈炎（台南、東京医専）が帰国したため、後任の生活部長に高銘智（台中、東工大）が就任、林連徳（福建、一高）が文化部長を辞任し、崔士彦（遼寧、一高）が後任になったことを掲載した。[46] 第三期執行部の交替はなおも続き、五月三〇日発行の『学生報』第七号には呉修竹副主席と蔡錦聡総務部長の辞任とともに、頼中和（台中、中央大）の副主席就任が掲載された。なお、同号は、後任の総務部長については言及していない。[47]

一連の執行委員交代の際、大陸出身者から大陸出身者へ、台湾出身者から台湾出身者へ引き継ぐ傾向が見られ、これは第二期と同様、第三期も大陸出身者と台湾出身者の人数バランスを考慮したためと考えられる。そして、入党時期は不明ながら、第三期の執行部委員のうち、范琦、王毓声、林連徳、崔士彦の四名が日共党員であったことが判明している。[48]

一九四七年九月に発足した第四期執行部は、図3で示した組織構成となっている。図2の第二期執行部と比較して組織が簡素化され、人員も減少したことが一目瞭然である。構成員一〇人の出身地を見ると、范琦（江西）、羅豫龍（新竹）、郭功凱（福建）、李敏徳（遼寧）、楊郁彬（台中）、林瑞聡（高雄）、呉崇亮（台中）、于恩洋（遼寧）、高銘智（台中）、林瑞安（高雄）と、大陸出身者は四名、台湾出身者は六名となっている。主席は大陸出身の范琦、二人の副主席は大陸出身者（郭功凱）と台湾出身者（羅豫龍）で分け合い、各部の責任者は大陸出身者二名、台湾出身者二名の同数で構成されていることから、第二期から始まった大陸出身者と台湾出身者のバランスに配慮した構成は第四期でも継承されたと言える。第四期の執行部のうち、日共党員であったことを確認できたのは、主席の范琦のみである。

一九四八年三月に発足した第五期執行部の委員のうち、姓名や出身地などを現在確認できるのは、表1に示した主席の王毓声（福建、一高）、副主席李樹本（安徽、一高）と頼中和（台中、中央大）の三人のみである。主席は大陸出身、副主席は大陸出身者と台湾出身者一名ずつという点に加え、日共党員が主席になる構成は維持された。

図4は、一九四八年一一月に発足した第六期執行部の組織図である。『学生報』の編集を専門に担当する学生報社が新設

図3　中華民国留日同学総会第四期執行部の組織図

主席　范琦（東大研究生）

副主席　羅豫龍（早大）　郭功凱（東工大）

- 会計部　李敏徳（東京美校）　楊郁彬（東工大）
- 文化部　林瑞聡（慶大）　呉崇亮（東歯医学専）
- 福利部　于恩洋（中大）　高銘智（東工大）　林瑞安（横浜高工）

出典：「前途に明るい希望と叡智　危機突破強力執行部成る　范琦主席留任・郭、羅両氏出馬」『中華留日学生報』一九四七年十月十五日に基づき、筆者作成。

図4　中華民国留日同学総会第六期執行部の組織図

主席　林連徳（東大経）

副主席　林傑栄（東大経）　高銘智（東工大）

- 総務部　李敏徳（東美）
- 文化部　郭承敏（一高）　崔士彦（商大）
- 福利部　薛栄（中大）　林師甫（東工大）
- 会計部　鄭江明（東工大）
- 学生報社
  - 社長　林連徳
  - 主編　崔士彦（商大）　呂永和（早大）
  - 編集　胡振邦（一高）　王敦旭（一高）
  - 経営　許柳村（宇都宮農林専卒）

出典：「同学総会東京同学会　委員改選　総会主席林連徳　副主席林傑栄、高銘智」『中国留日学生報』一九四八年十二月一日に基づき、筆者作成。

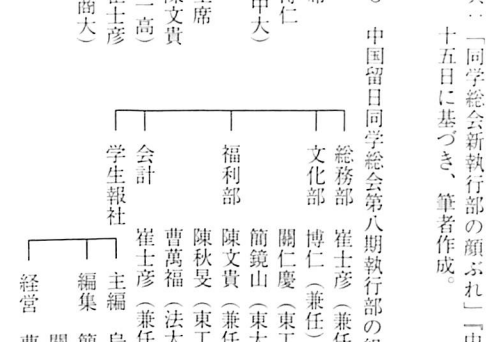
され、五部門体制に改編されている。

第六期執行部委員十三名の出身地を見ると、大陸出身者が主席の林連徳（福建、一九五〇年日共入党）、副主席の林傑栄（福建出身、家族は台南在住、日共党員）、各部の委員では李敏徳（遼寧）、崔士彦（遼寧、日共党員）、呂永和（河北、日共党員）、胡振邦（湖北）、王敦旭（江蘇）の七名、台湾出身者は副主席の高銘智（台中）、委員の郭承敏（高雄、日共党員）、薛栄（高雄）、林師甫（台南）、鄭江明（高雄）、許柳村（台南、日共党員）の六名となっており、半々の構成比は維持されたと判断できる。[49] しかも、大陸出身だが、家族は台湾在住という林傑栄の執行部入りによって、大陸出身者と台湾出身者の均衡重視の傾向は一段と強まったと言える。

また、一九四八年時点で入党を確認できた日共党員（一九四八年時点で未入党の林連続を除く）は執行部内に五名いた。特に、同学総会の主たる業務である文化活動を担当する文化部、そして『学生報』の出版を担当する学生報社のメンバー全七名のうち、四名は当時すでに日共党員であった。これらの点から、一九四八年十一月の時点で、同学総会は日共の指導下にすでに入っていたという郭承敏の回想録での指摘は、事実に即したものと考えられる。[50]

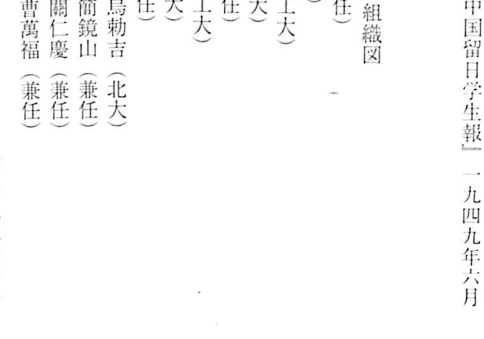
また、この時期に留日学生の親共産主義活動が活発化したことを象徴する出来事があった。それは二つの華僑学生団

図5　中華民国留日同学総会第七期執行部の組織図



出典：「同学総会新執行部の顔ぶれ」『中国留日学生報』一九四九年六月十五日に基づき、筆者作成。

図6　中国留日同学総会第八期執行部の組織図



出典：「同学総会新執行委員の顔ぶれ」『中国留日学生報』一九五〇年二月一日に基づき、筆者作成。

体（華僑民主促進会と民主中国研究会）の誕生である。一九四八年十二月一日刊行の『学生報』には、両団体の設立過程について「民主中国研究会は、十月十七日午後東京同学会文化ホールで三十数名の有志の参加を得て結成され、事務所を東京同学会内に置いている。華僑民主促進会は、去る十月十七日に同ホールで設立大会が開かれ、メンバー全員が現在日本で結成されている「民主主義擁護同盟」に参加している。事務所は中国通信社に置いてある」と書かれている。[51] 同学総会はこの時期にすでに日共細胞（支部）の指導下にあり、東京同学会と同学総会の事務所が同じ場所にあったことから、事務所を同学総会と同じ場所に構えた民主中国研究会も日共の指導下にあったと考えられる。これに関連して、日共党員の王兆元は当時、東京同学会の活動をまとめた『学生報』の掲載記事の中で「民主中国研究会は東京同学会の中堅的組織である」ことの重要性を強調した。[52] 一方、中国通信社は、日共党員であった楊春松をはじめとする親共産主義の華僑たちが作った通信社であり、そこに事務所を置く華僑民主促進会も日共の指導を受けた可能性が高い。[53]

図5は、一九四九年五月に始動した第七期執行部の組織図である。執行部は、主席の李桂山（吉林、日共党員）、副主席に張玉峯（出身地不明）と陳文貴（台南、日共党員）、各部委員に烏勒吉（熱河）、崔士彦（遼寧、日共党員）、周秋甫（台北、日共党員）、

許雲岑（台中）、劉徳琴（新竹）、黄仁坤（新竹、日共党員）、呂永和（河北、日共党員）、王兆元（河北、日共党員）、胡振邦（湖北）、郭承敏（高雄、日共党員）、博仁（熱河、日共党員）、の計十四名のメンバーで構成された。出身地別では、大陸出身者七名、台湾出身者六名（不明の張玉峯を除く）となっている。また、九名が日共党員であることが確認され、執行部の半分以上を占めた。[54]

図6は、一九四九年十一月に始動した第八期執行部の組織図である。この期の執行部は兼任が多かったため、メンバーは主席の博仁（熱河、日共党員）、副主席の陳文貴（台南、日共党員）と崔士彦（遼寧、日共党員）、各部委員（兼任を除く）の關仁慶（河北）、簡鏡山（台中）、陳秋旻（台中）、曹萬福（台北）、烏勒吉（熱河）の計八名であった。[55] 出身地別では、大陸出身者と台湾出身者が四名ずつであった。日共党員は三名と前期に比べて減少したが、主席と副主席はいずれも日共党員であることが確認された。

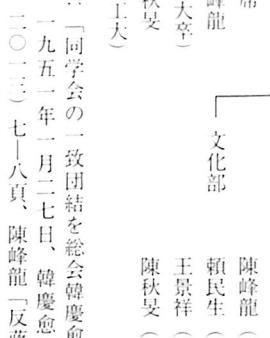
図7　中国留日同学総会第九期執行部の組織図

出典：「全国会員代表大会」『中国留日学生報』一九五〇年七月一日、『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）三三―一二六頁、郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』（明文書房、二〇一四年）八四頁に基づき、筆者作成。

図7は、一九五〇年五月に始動した第九期執行部の組織図である。メンバーは主席の王兆元（河北、日共党員）副主席の洪山海（台中）と陳志堅（台中、日共党員）、各部委員（兼任を除く）の喬傳源（遼寧）、孫盛毅（北京）、邱永川（台湾、具体的な出身地不明）、崔士彦（遼寧、日共党員）、郭承敏（高雄、日共党員）の計八名で、人数は前期と変わらなかった。[56] 執行部全体で見れば、大陸出身者と台湾出身者が四名ずつの比率を維持しているものの、副主席二名はいずれも台湾出身者となり、同ポストを大陸出身者と分け合う構造に変化が生じている。日共党員であることを確認できた執行部メンバーは四名おり、特に『学生報』の編集担当は二名とも日共党員であったことから、一九五〇年五月時点においても、日共は同学総会、『学生報』を指導していたと言える。

図8は、一九五〇年十二月に始動した第十期執行部の組織図である。メンバーは、主席の韓慶愈（遼寧、日共党員）、副主席の陳峰龍（台南、日共党員）と陳秋旻（台中）、各部委員の程貴（浙江）、鄧健吾[57]（在日華僑）、陳耕（江蘇）、頼民生（新竹）、王景祥（台

図8　中国留日同学総会第十期執行部の組織図



出典：「同学会の一致団結を総会韓慶愈主席挨拶」『中国留日学生報』一九五一年一月二七日、韓慶愈『留日七十年』（学苑出版社、二〇一三）七―八頁、陳峰龍「反蔣愛国　矢志不二」『回国五十年――建国初期回国旅日華僑留学生文集』（台海出版社、二〇〇三年）二四九―二五六頁、『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）一三三―一三〇頁、「全体会員代表大会報告　妻子にも旅費貸与」『中国留日学生報』一九五三年一月一・一五日合併号、『北京―高会通訊　嚶鳴　一九九五―二〇〇五合訂本』（未公刊物、二〇〇六年一月、北京）三九三頁に基づき、筆者作成。

北）の計八名であった。出身地別で見ると、大陸出身者は三名、台湾出身者は四名、在日華僑出身者一名となり、在日華僑出身者が一九五〇年の時点で同学総会の会員にとどまらず、執行部入りしたことが判明した。当時、一九四九年一〇月の中華人民共和国の建国を受け、同学総会の会員が幹部も含めて秘密裏に帰国し始めた。その影響で、同学総会の会員構成も変化し始めたと言える。執行部メンバーのうち、二名（主席、副主席の一人）が日共党員であったことが判明している。

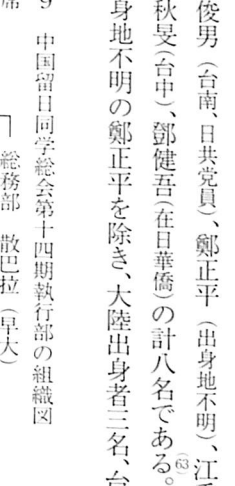
一九五一年から一九五二年前半の『学生報』のほとんどが欠号により、掲載記事を把握できたのは五号（発行日ベース）にとどまった。そのため、第十一期（一九五一年七月発足）から第十三期（一九五二年五月発足）までの執行部は具体的な組織構成を確認できず、判明したのは表1で示した主席と副主席である。第十一期の主席には陳峰龍（台南、日共党員、中大卒）、副主席には陳文貴[58]（台南、日共党員、一高卒、都立大）と楊秀勇[59]（台湾（詳細な出身地不明、早大）が就任した。同年十一月に始動した第十二期主席には馬広秀[60]（安東、日共党員、東工大予備部卒）、副主席には陳秋旻（台中、東工大）である。そして、一九五二年五月に始動した第十三期主席には劉璋温（広東、日共党員、東大）、副主席には蕭龍光[61]（江西、東工大）が就任した。出身地情報から見れば分かるように、第十一期以降、出身地域のバランスが考慮されなくなり、期によって主席・副主席とも台湾出身者が占め、期によっては両ポストを大陸出身者が占める構成となった。このような変化が生じた主な理由として、同学総会に対する日共の指導力低下が挙げられる。元同学総会主席の郭平坦は、朝鮮戦争の勃発前後、GHQは共産党への弾圧を行い、日共が一時壊滅状態となった。結果、同学総会の指導にまで手が回らなくなった。専門の特派員はいたものの、この頃になると、日共全国の組織自体が機能不全の状況

に陥ったため、一九五二年以降、日本での活動は人民政府華僑事務委員会（以下、僑委）が直接指導するようになり、我々（同学総会）は僑委を通じて中共の指導を実質的に受けるようになったと回想する。[62]

つまり、一九五〇年代に入ると、GHQの弾圧で日共は同学総会を指導できなくなり、同学総会の主席に日共党員の留日学生が就任する慣例こそ一九五五年まで続いたものの、実質的な指導は中共によって行われるようになったのである。

図9は、一九五二年十二月に始動した同学総会第十四期執行部の組織図である。執行部メンバーは、主席の韓慶愈（遼寧、日共党員）、副主席の蕭龍光（江西）、各部委員の散巴拉（遼寧）、劉俊男（台南、日共党員）、鄭正平（出身地不明）、江重光（在日華僑）、陳秋旻（台中）、鄧健吾（在日華僑）の計八名である。[63]出身地別では、出身地不明の鄭正平を除き、大陸出身者三名、台湾出身者二名、在日華僑出身者二名となっており、同学総会の会員に高校生以上の華僑学生が増えてきた状況を反映したものと言える。[64]日共党員であることが判明したのは二名であった。第十四期執行部が発足した一九五二年十二月は、国府の補助金が停止される一方、人民政府からの救済金が送付され始めた時期であるが、同学総会に対する中共の指導体制は十分には整っていなかったと考えられる。[65]

図9　中国留日同学総会第十四期執行部の組織図



出典：「全体会員代表大会報告　妻子にも旅費貸与」『中国留日学生報』一九五三年一月一・十五日合併号に基づき、筆者作成。

図10は、一九五三年五月に始動した同学総会第十五期執行部の組織図である。前期と比べて組織が大幅に拡充したことが分かる。この拡充は会章の改訂により、支援を必要とする日本全国の会員に人民政府からの救済金を配布するための専門部署（奨学会）を執行部内に新設したことが主因として挙げられる。[66]執行部メンバーは、主席の韓慶愈（遼寧、日共党員）、副主席の郭平坦[67]（台南出身在日華僑、日共党員）と劉俊男（台南、日共党員）、各部委員（兼任を除く）の鄭正平（出身地不明）、江重光（在日華僑）、陳賀春（在日華僑）、李漢波（吉林）、陳富美（在日華僑）、邱茂[68]（台北出身在日華僑、日共党員）、陳栄照[69]（台湾雲林県）、張銘忠（遼寧）、曽国忠（出身地不明）、黄文欽（台北）、劉璋温（広東、日共党員）、張城（台湾、具体的な出身地不明）、陳粱榕（台南）、林天義（出身地不明）、許秋木（旧満州、具体的な出身地不明）、翁国灶[70]（台湾、具体的な出身地不明）、蕭龍光（江西）、散巴拉（遼寧）、黄仁坤（新竹）の計二二名であった。[71]出身地別では、大陸出身者七名、台湾

図10　中国留日同学総会第十五期執行部の組織図

- 主席
  - 韓慶愈（東工大卒）
- 副主席
  - 郭平坦（早大）
  - 劉俊男（中大在）
- 総務
  - 韓慶愈（兼任）
  - 鄭正平（千工大在）
  - 江重光（法大卒）
- 組織
  - 郭平坦（兼任）
  - 陳賀春（法大在）
- 福利
  - 李漢波（一高卒）
  - 陳富美（美高在）
- 文化
  - 劉俊男（兼任）
  - 邱茂（理大在）
- 会計
  - 陳栄照（中大在）
- 奨学会常任理事会
  - 理事長　張銘忠（東工大卒）
  - 常任理事　曽国忠（中大在）
  - 黄文欽（早大）
  - 劉璋温（東大卒）
- 評議委員会
  - 評議員
    - 張城（東京、中大卒）
    - 陳棠榕（東京、理大在）
    - 林天義（京都、立命大卒）
    - 許秋木（大阪、満州医大卒）
    - 翁国灶（北海道大在）
    - 蕭龍光（工大在）
    - 散巴拉（早大在）
    - 黄仁坤（東大卒）
- 学生報編集委員

出典：「第十五回同学総会委員名簿」『中国留日学生報』一九五三年六月五日に基づき、筆者作成。

出身者七名、在日華僑出身者五名（出身地不明の三名を除く）となっている。また、主席、副主席を含む五名が日共党員であったことが判明している。特に注目すべき点は、一九五二年末に中国から救済金が送付された直後に発足した第十四期の執行部より日共党員の資格を持つ幹部が増えていることであろう。もっとも、当時の状況を勘案すると、日共の指導が強化されたためではなく、中共による同学総会への指導が強化された結果と考えられる。実際、一九五三年六月以降、在中国日本人を迎えに行く日本政府の引き揚げ船に、華僑、留日学生が便乗して中国へ帰国するケースが相次いだ。その際、同学総会の幹部も乗船代表として天津、北京に赴き、僑委及び中共中央の幹部に直接指導や指示を受けるようになった。第十五期同学総会の副主席で、一九五三年一〇月の帰国船に乗って中国に行った郭平坦は、筆者のインタビューに対してこのように答えるとともに、日本に戻る際、僑委幹部で日共党員でもあった楊春松から、同学総会は日共を含む日本での政治活動に一切参加しないようにとの指示を直接受けたと証言した。[72]

図11は、一九五三年十一月に始動した第十六期執行部の組織図である。メンバーは、主席の呂永和（河北、日共党員）、副主席の凌憲民[73]（在日華僑）と郭平坦（台南出身在日華僑、日共党員）、各部委員の邱茂（台北出身在日華僑、日共党員）、陳学全[74]（大陸出身

在日華僑）、何文健（出身地不明）、孫穎達（出身地不明）、張祥秀（出身地不明）、李秀雄（出身地不明）、林寿源（出身地不明）、曽国忠（出身地不明）、張銘忠（遼寧）、陳栄榕（台南）、劉璋温（広東、日共党員）の計一四名であった。名前は判明したものの、出身地不明が六名と、同期メンバーのほぼ半分を占めた背景には、二つの要因がある。

第一の要因は、資料の制約である。『学生報』には時折、同学総会の幹部が執筆した文章や執行部委員名簿が掲載されたが、その場合、在学あるいは卒業した学校の名称は書かれていても、出身地は示されないことが多かった。こうした事情から、筆者は出身地調査の際、同学総会が作成した『中華民国留日学生名簿』（一九四六年九月時点）と林清芬『臺灣戰後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』（国史館、二〇〇一年）に掲載された駐日代表団の補助金を一九四九年以降受領した留日学生の名簿を主に利用した。ところが、卒業、就職、帰国などの理由で同学総会の活動から離脱する留日学生が増えるにつれ、これらの名簿を用いる手法では、後期になるほど出身地の確認が困難になった。特に、一九五三年は三回の集団帰国により、一年で三〇〇〇人近い在日華僑、台湾出身を含む留日学生が日本から中国に向かった。資料に掲載された留日学生の多くも帰国した同年を境に、出身地不明者が執行部内で急増したのである。

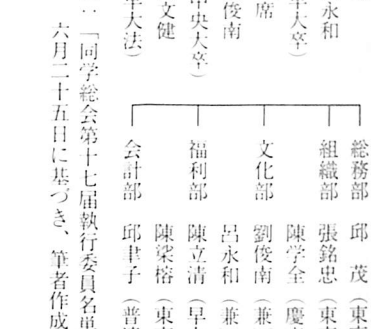
図11　中国留日同学総会第十六期執行部の組織図

- 主席　呂永和（早大）
- 副主席　凌憲民（一橋大）、郭平坦（早大）
- 総務部　郭平坦（兼）
- 組織部　凌憲民（兼）
- 文化部　邱茂（理科大）、陳学全（慶応高）、何文健（早大）、孫穎達（小石川高）、張祥秀（白鷗高）
- 福利部　李秀雄（早大）、陳永祺（中央大）、林寿源（理科大）
- 会計部　陳永祺（兼）
- 学生報　曽国忠（中央大）
- 奨学会常任理事　張銘忠（工大卒）、陳栄榕（理科大）、劉璋温（東大卒）

出典：「同学総会第十六届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五三年十二月十五日に基づき、筆者作成。

第二の要因は、在日華僑出身者の増加に伴う会員構成の変化である。在日華僑出身者の増加は、戦前からの留日学生が帰国等で大幅に減少したことを受け、在日華僑の子弟を同学総会に積極的に勧誘した結果である。[75] 在日華僑学生からすれば、中国政府からの救済金を受給できるため、同学総会への参加は経済的なメリットをもたらすものでもあった。在日華僑出身者の会員増は、同学総会の執行部の構成にも変化をも

図12　中国留日同学総会第十七期執行部の組織図



出典：「同学総会第十七届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五四年六月二十五日に基づき、筆者作成。

たらした。第十六期執行部の全十四名のうち、『学生報』や留日学生の回想録などの資料や筆者のインタビュー調査によって出身地が判明したのは八名であり、大陸出身者三名、台湾出身者は一名にとどまる一方、台湾出身在日華僑を含む在日華僑出身者は四名で最も多く、「同学会は老会員から僑胞子弟へと変化している。十六期の委員構成はその縮図である」と当時述べた副主席の凌憲民の指摘の妥当性を裏付けるものと言える。[76] 同学総会の会員になった在日華僑学生の大部分は、前述した名簿には入っていなかったうえ、出身地を示す必要がなかった。したがって、出身地不明とされた第十六期執行部メンバーの多くは、在日華僑の留日学生であった可能性が高いと考えられる。[77]

また、メンバーのうち、四名が日共党員であり、主席一名と副主席一名も含まれていた。ただし、第十六期執行部の発足当時の状況を勘案すると、日共の同学総会に対する指導は有名無実化し、実質的には中共の指導を受ける過渡期と推測される。

図12は、一九五四年五月に始動した第十七期執行部の組織図である。メンバーは、主席の呂永和（河北、日共党員）、副主席の劉俊南（台南、日共党員）と何文健（出身地不明）、各部委員の邱茂（台北出身在日華僑、日共党員）、張銘忠（遼寧）、陳学全（大陸出身在日華僑）、陳立清[78]（在日華僑）、陳梁榕（台湾）、邱聿子（出身地不明）の計九名であった。出身地別では、大陸出身者二名、台湾出身者二名、在日華僑三名、不明二名となっているが、第十六期と同様、第十七期も出身地不明者は在日華僑である可能性が高い。これに関連して、第十七期副主席の劉俊南は「第十七期執行部メンバーの大半は若い僑胞の子弟である」と『学生報』で述べている。この劉の証言から、二人とも在日華僑であったことはほぼ間違いない。[79] 日共党員であることが判明したのは、主席と副主席一名に加え、総務部委員の邱茂の計三名であった。同学総会の幹部になるには、在日華僑出身者でも日共への入党がなお有利に作用した模様である。

図13は、一九五四年十一月に始動した同学総会第十八期執行部の組織図である。メンバーは、主席の郭平坦（台南出身の

図13　中国留日同学総会第十八期執行部の組織図

出典：「同学総会第十八届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五四年十二月十五日に基づき、筆者作成。

図14　中国留日同学総会第十九期執行部の組織図

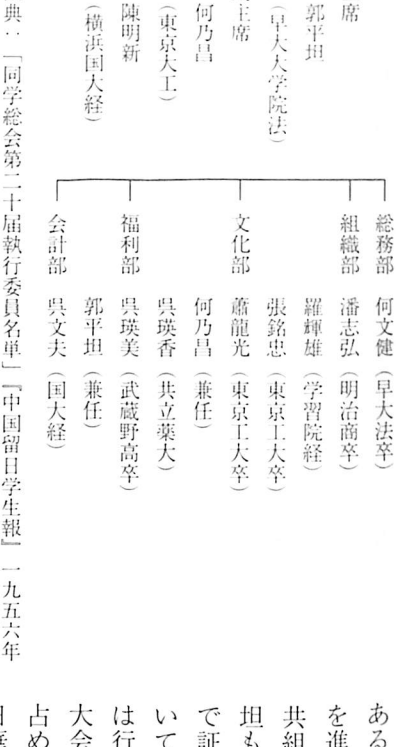
出典：「同学総会第十九届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五五年九月一日、「同学総会第二十届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五六年二月一日、「陳立清文庫」設立時に陳の遺族が書いた「陳立清紹介」（http://www.wang-xueping.com/chenprofile.pdf　二〇二二年五月六日アクセス）に基づき、筆者作成。

在日華僑、日共党員）、副主席の陳梁榕（台南）と何文健（出身地不明）、各部委員の邱茂（台湾出身の在日華僑、日共党員）、張銘忠（遼寧）、陳学全（大陸出身在日華僑）、陳立清（在日華僑）、呂永和（河北、日共党員）、陳清源[80]（台湾、具体的な出身地不明）、邱仲瑛[81]（台北）の計一〇名であった。出身地別では、大陸出身者二名、台湾出身者三名、在日華僑出身者四名（不明の一名を除く）であり、郭平坦は在日華僑として初めて同学総会の主席に就任した。会員及び執行部の構成に、主席ポストが加わり、同学総会は華僑子弟主体の組織となった[82]。

日共党員であったことが判明したメンバーは、主席の郭平坦を含む三名であった。この頃になると、廖承志は必要に応じて同学総会宛てに手紙を出し、「命令」という言葉で同学総会に対日業務への協力を直接指示するようになり、僑委とは上下関係を意識する間柄であったと、筆者のインタビューに対し郭平坦はそう証言した[83]。

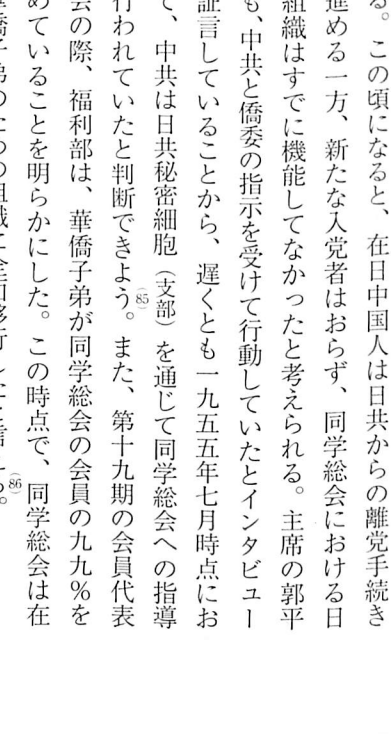
図14は、一九五五年七月に始動した同学総会第十九期執行部の組織図である。メンバーは、主席の郭平坦（台南出身の在日華僑、日共党員）、副主席の陳清源（台湾、詳細な出身地不明）、何文健（出身地不明）、各部委員の張銘忠（遼寧）、陳園紫（出身地不明）、陳立清（在日華僑）、楊人津（出身地不明）、呉瑛美（彰化）の計八名であった[84]。出身地別では、大陸出身者一名、台湾出身者二名、在日華僑出身者二名（不明の三名を除く）である。

図15　中国留日同学総会第二十期執行部の組織図



出典：「同学総会第二十届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五六年二月一日に基づき、筆者作成。

図16　中国留日同学総会第二十一期執行部の組織図



出典：「執行部名単」『中国留日学生報』一九五六年九月一日に基づき、筆者が作成した。

日共党員であったことが判明したのは主席の郭平坦のみである。この頃になると、在日中国人は日共からの離党手続きを進める一方、新たな入党者はおらず、同学総会における日共組織はすでに機能してなかったと考えられる。主席の郭平坦も、中共と僑委の指示を受けて行動していたとインタビューで証言していることから、遅くとも一九五五年七月時点において、中共は日共秘密細胞（支部）を通じて同学総会への指導は行われていたと判断できよう。[85] また、第十九期の会員代表大会の際、福利部は、華僑子弟が同学総会の会員の九九％を占めていることを明らかにした。この時点で、同学総会は在日華僑子弟のための組織に全面移行したと言える。[86]

図15は、一九五六年一月に始動した同学総会第二十期執行部の組織図である。メンバーは、主席の郭平坦（台南出身の在日華僑）、副主席の何乃昌[87]（河北）と陳明新[88]（在日華僑）、各部委員の何文健（出身地不明）、潘志弘[89]（在日華僑）、羅輝雄[90]（在日華僑）、張銘忠（遼寧）、蕭龍光（江西）、呉瑛香[91]（在日華僑）、呉瑛美（彰化）、呉文夫[92]（在日華僑）の計十一名であった。出身地別では、大陸出身者三名、台湾出身者一名、在日華僑出身者六名（不明の一名を除く）となっている。在日華僑出身者が同学総会の会員の大部分、執行部の過半数を占めた一方、大陸出身の古参会員が執行部に復帰したことも第二十期執行部の特徴である。

図16は、一九五六年七月に始動した同学総会第二十一期執

図17　中国留日同学総会第二十二期執行部の組織図

主席　陳学全（慶大法）
副主席　邱茂（理大化）、楊忠銀（専大商）
総務部　呉瑛香（井薬大卒）
組織部　石嘉福（日大農）、李国雄（中大文）、何水玉（東大経）、王万海（明大文）、薛英吉（中大商）、翁文子（宮津高卒）
文化部　盧博鑑（法大文）
福利部
会計部

出典：「同学総会第廿二届執行委員名単」『中国留日学生報』一九五七年五月一日に基づき、筆者が作成した。

行部の組織図である。『学生報』第一〇六号は、執行部委員全員が在日華僑出身と指摘した。[93] そのため、主席の陳明新、副主席の羅輝雄と陳学全、各部委員の許義美、呉文夫、李国雄、薛英吉、盧福友の八人とも在日華僑出身者と断定できる。これも、同学総会が設立当初の大陸と台湾からの留日学生の組織から在日華僑の子弟である華僑学生のための組織に全面移行した表れである。

図17は、一九五七年五月に始動した第二十二期執行部の組織図である。メンバーは、主席の陳学全（在日華僑）、副主席の邱茂（台湾出身の在日華僑）と楊忠銀[94]（在日華僑）、各部委員の呉瑛香（在日華僑）、石嘉福[95]（台湾出身の在日華僑）、李国雄（在日華僑）、盧博鑑（出身地不明）、何水玉（出身地不明）、王万海[96]（在日華僑）、薛英吉（在日華僑）、翁文子（出身地不明）、計十一名であった。出身地別では、八名が在日華僑、三名が不明となっている。第二十一期と異なり、第二十二期執行部メンバー十一名の出身地に関する情報が『学生報』に全員分掲載されたわけではなかったため、三名の出身地は判明しなかった。ただし、第十六期以降の趨勢から、三人の出身地不明者も在日華僑であった可能性が高い。主席、副主席が全員在日華僑出身者であった点なども勘案すれば、在日華僑出身の青年学生が同学総会の業務を主に担っている状況に変化はなかったと判断できよう。

おわりに

同学総会は、戦勝国民としての特別配給の獲得など、自らの利益を守るため日本各地に誕生した数多くの留日学生団体が統合される過程で、国府駐日代表団の指導の下、中国大陸及び台湾出身の留日学生の統一団体として一九四六年五月に設立した。設立当初、大陸系と台湾系の留日学生は第一部と第二部に分かれ、一体的な活動は困難であった。その主な理由として、同学総会では少数派の大陸出身の留日学生が第一期執行部の主要ポストを握り、台湾出身者はその補佐役しか割り当てられなかったことが挙げられる。この問題を解決す

べく、第一期主席の博定を中心に対応を検討した結果、第二期の執行部は副主席、各部の部長、副部長を大陸系と台湾系で半分ずつになるよう構成を変更し、大多数の会員が台湾系であるにもかかわらず、大陸系の留日学生が主導する執行部のアンバランスは是正された。

一九四八年に入ると、『学生報』に表れた同学総会執行部及び同会会員の思想傾向の左傾化、親共産主義傾向が徐々に強まった。これは国府に対する失望に起因するものであった。失望の具体例として、駐日代表団の対応、二・二八事件、国共内戦に伴う日本への占領部隊派遣計画の中止などが挙げられる[97]。戦後、留日学生や華僑の間で中国語学習がブームとなり、大陸からの留日学生は留日学生の中でも尊敬を集める立場にあった。一方で、大陸からきた留日学生の多くは、日本の傀儡政権が派遣されたため、「漢奸」に見られたくないとの思いからか、進歩的な思想を拠りどころとして求めるようになった。こうした時期に、駐日代表団によって、「漢奸」扱いされるなどの冷遇を受けたこともあって、彼らは共産党の主張の方に共感したようである[98]。さらに、東京大学や京都大学など、日本の名門大学を戦争直後に卒業した大陸出身の留日学生は、生計を維持するために華僑学校で教鞭を取る事例が少なくなかった。彼らは華僑学校の生徒に対して読書会などの活動を積極的に行い、共産主義思想の学習を生徒に促した。日本の華僑青年学生の間で共産主義思想を信奉する人が大幅に増加した原因の一つとして、こうした事情を指摘できる[99]。

設立当初から、日共党員が所属していた可能性が高いが、同学総会が親共産主義の団体へと舵を切ったきっかけは、一九四八年六月に中共と日共の合意によってつくられた秘密組織、留日学生日共細胞（支部）の発足である。一九四七年から一九五五年にかけて、同学総会の主席は全員日共党員であった。特に、一九四八年十一月に発足した第六期執行部の場合、委員十三名のうち五名が日共党員であり、同学総会の主たる業務を担当した文化部及び学生報社に限れば、メンバー七名のうち四名が当時すでに日共に入党していたことは、一九四八年の日共支部成立後に同学総会に対する日共の指導が一段と強化されたことを示すものである。

一九四九年までの執行部は、大陸出身者と台湾出身者が半々の比率を維持していたが、一九五〇年五月に大陸出身と台湾出身で副主席の二つのポストを分け合う構成が見直された後、大陸と台湾出身者が半分ずつというバランスは徐々に崩れた。大陸及び台湾出身の会員が中国大陸に帰国するに連れ、在日華僑出身者が同学総会の活動に参加し、執行部の業務にも携わるようになる。特に一九五三年の留日学生、華僑の集団帰国後は、在日華僑出身者の入会が急増した。また、執行部入りし、同学総会で指導的な役割を担う場合、在日華僑の留日

学生にとっても日共への入党は、プラスであったと考えられる。

ところが、一九五〇年の朝鮮戦争開始後、GHQのレッドパージを受けた日共は同学総会を実質的に指導できなくなった。留日学生の日共細胞（支部）は厳しい状況下で自主活動を続けたものの、一九五二年以降は中共及び人民政府国務院の下部組織である僑委の指導下に置かれた。翌年以降、不定期ながら、同学総会の幹部は帰国船の乗船代表として中国大陸に赴き、中共と僑委から直接指導を受けるようになった。一九五四年には、中国紅十字社の代表団が訪日、代表団の副団長であり、人民政府の対日業務責任者であった廖承志が同学総会の事務所を訪れ、在日華僑、留日学生に対して日本で政治活動に参加しないこと、日共からの離党を指示した。そして、留日学生日共細胞（支部）は一九五五年に解散し、日共による同学総会への指導は名実ともに終了した。中共及び僑委による指導は日共細胞（支部）解散後も継続されたが、華僑の子弟が同学総会の会員の九九％を占めるようになったことや中国の財政難などを背景に、僑委から留日学生への救済金の支給は一九五七年に停止された。これを契機として、同学総会の活動は事実上停止し、在日華僑出身の留日学生は旅日青年聯議会で活動するようになった。人民政府が親中共の東京華僑総会を通じて在日華僑、留日学生の対中協力活動を指導していたため、旅日青年聯議会も東京華僑総会と連携を取りながら、中共及び人民政府の対日業務に協力したのである。[10]

注

（1）本章は東洋大学井上円了記念研究助成「冷戦初期日本共産党と中国共産党による在日中国人留学生団体への指導体制に関する実証的研究」（研究代表者：荒川雪）、日本学術振興会科学研究費（基盤研究B）「戦後冷戦初期日本の華僑社会に関する実証的研究――東アジア秩序の再構築」（研究代表者：陳來幸、研究課題／領域番号18H00703）、科学研究費（基盤研究C）「戦後日中関係史の再検討――国共双方の対日工作の展開と中国人団体・中国関連団体の役割」（研究代表者：荒川雪（王雪萍）、研究課題／領域番号21K00910）、科学研究費（基盤研究B）「教育の交流と東アジア国際関係――中国人留学生の派遣と支援」（研究代表者：孫安石、研究課題／領域番号17H02686）による研究成果である。また、本章執筆過程で、東京大学名誉教授田島俊雄氏及び神戸大学名誉教授安井三吉氏による史料提供があったことに対して謝意を申し上げる。

（2）立脇和夫「占領期日本の対外経済関係と外国為替銀行（上）」『早稲田商学』第三七一号、一九九六年一二月、三一三―三四五頁。

（3）王雪萍「戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤――救済金問題を事例に」大里浩秋編著『戦後日本と中国・朝鮮――ブランゲ文庫を一つの手がかりとして』（研文出版、二〇一三年）八三―一一九頁。

（4）田中剛「終戦後の華僑と日本の華僑政策」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』（丸善出版、二〇一七年）二一〇―二一一頁。

（5）『学生報』の正式名称は、創刊時の『中華民国留日学生旬報』から『中華留日学生報』、『中国留日学生報』と何度か変更した。本章では本文で略称である『学生報』に表記統一したが、注釈に

は当該号の正式名称を記している。

(6) 王雪萍「在日中国人メディアが記録した留日学生の思想の変化――中国留日同学総会の機関紙『中国留日学生報』（一九四七―一九四九）を手がかりに」『東洋大学社会学部紀要』（東洋大学社会学部）第五七―一号、二〇一九年一二月、二一―三八頁。

(7) 「日本共産党華僑留学生支部的誕生」北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会二〇年》編輯部編『中国留日同学総会二〇年』（北京日本帰僑聯誼会、二〇一五年）四四―四五頁。

(8) 元同学総会主席郭平坦氏へのインタビュー（二〇一五年六月十二日、北京）。

(9) 何義麟「戦後在日台湾人的処境與認同」（五南出版、二〇一五年）。陳来幸「在日台湾人アイデンティティの脱日本化――戦後神戸・大阪における華僑社会変容の諸契機」貴志俊彦編著『近代アジアの自画像と他者――地域社会と「外国人」問題』（京都大学学術出版会、二〇一一年）八三―一〇五頁。

(10) 川島真「過去の浄化と将来の選択――中国人・台湾人留学生」劉傑・川島真編『一九四五年の歴史認識――〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』（東京大学出版会、二〇〇九年）三一―五一頁。

(11) 永野武『歴史とアイデンティティ――在日中国人』（明石書店、一九九四年）一三四―一三五頁。

(12) 前掲陳來幸「在日台湾人アイデンティティの脱日本化――戦後神戸・大阪における華僑社会変容の諸契機」八三―一〇五頁。

(13) 竹前栄治・中村隆英監修『GHQ日本占領史　第一六巻　外国人の取り扱い』（日本図書センター、一九九六年）二〇―四二頁によると、一九四九年に一万九八〇七名の中国人が日本に滞在している。『回国五十年――建国初期回国旅日華僑留学生文集』（台海出版社、二〇〇三年）一―二頁によると、一九五〇年代には四万人程度の華僑が日本に滞在していた。

(14) 前掲川島真「過去の浄化と将来の選択――中国人・台湾人留学生」三一―五一頁。

(15) 何義麟「戦後在日台湾人之処境与認同――以蔡朝炘先生的経歴為中心」『台湾風物』第六〇巻第四期、二〇一〇年、一六一―一九四頁。

(16) 田中剛「終戦後の華僑と日本の華僑政策」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』（丸善出版、二〇一七年）二一〇―二一一頁。日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』（日本僑報社、二〇〇六年）一六七―一六八頁。

(17) 前掲何義麟「戦後在日台湾人之処境与認同――以蔡朝炘先生的経歴為中心」一六一―一九四頁。

(18) 前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』二二二―二二八頁。呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史――呉修竹回想録』（彩流社、二〇一八年）五六頁。

(19) 前掲何義麟「戦後在日台湾人之処境與認同――以蔡朝炘先生的経歴為中心」一六一―一九四頁。

(20) 前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』二二二―二二八頁。

(21) 中国留日同学総会元主席郭平坦へのインタビュー、二〇一二年二月十日、北京。

(22) 前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』五五頁。

(23) 前掲何義麟「戦後在日台湾人之処境與認同――以蔡朝炘先生的経歴為中心」一六一―一九四頁。前掲川島真「過去の浄化と将来の選択――中国人・台湾人留学生」三一―五一頁。前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』二八頁。「大陸籍的東京同学会与台湾学生聯盟合併成立中国留日同学総会」北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会二〇年》編輯部編『中国留日同学総会二〇年』（北京日本帰僑聯誼会、二〇一五年）一九―二〇頁。

(24) 前掲川島真「過去の浄化と将来の選択――中国人・台湾人留学生」三一―五一頁。

(25) 前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』二八―三〇頁。

(26) 前掲田中剛「終戦後の華僑と日本の華僑政策」二一〇—二一一頁。
(27) 『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）一三三頁（東洋文庫所蔵）。
(28) 「成果を期待——工大で国語講習会」『留日学生旬報』一九四七年七月一日。
(29) 林連徳「中国留日同学総会側記」全国政協〒北京、上海、天津、福建政協文史資料委員会編『建国初期留学生帰国紀事』（中国文史出版社、一九九九年）三九七—四〇四頁。
(30) 前掲『中華民国留日学生名簿』一—一三二頁。
(31) 前掲呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史——呉修竹回想録』四八—五二頁。
(32) 博定『不整脈ワークショップ』（株式会社医学書院、一九八二年）著書略歴。博堅（大河内敏弘訳）「父、福島高商外人教師・博棣華について」『季刊中国』No.99、二〇〇九年一二月、五五—六六頁。前掲呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史—呉修竹回想録』五二—五三頁。
(33) 博定「回顧談　同学総会の成立迄」『中国留日学生報』一九五七年六月一日。
(34) 前掲『中華民国留日学生名簿』一—一三二頁。一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』（未刊行物）。「祝　御入学　御卒業」『中国留日学生報』一九五一年五月一二日。頓中和「為振興中華、祖国統一大業奮闘終生」『回国五十年—建国初期回国旅日華僑留学生文集』（台海出版社、二〇〇三年）三四五—三五一頁。林鉄錚「同学総会十年の歩み——同学会の前身旅日台湾学生連盟初期の思い出」『中国留日学生報』一九五七年五月一日。
(35) 李子聰「出版文化活動への回顧——過去一年間の編輯生活の体験から」『中華民国留日学生旬報』一九四七年三月一〇日。
(36) R・スウェアリンゲン、P・ランガー共著、吉田東祐訳『日本の赤い旗——日本共産党三十年史　一九一五—一九五二年』（コスモポリタン社、一九五三年）一二六—一五一頁。
(37) 前掲『中華民国留日学生名簿』三四、五六頁。前掲一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』。
(38) 郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』（明文書房、二〇一四年）九七—九八頁。
(39) 前掲一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』。
(40) 前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』九九—一〇〇頁。
(41) 「日本共産党華僑留学生支部的誕生」北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会二〇年》編輯部編『中国留日同学総会二〇年』（北京日本帰僑聯誼会、二〇一五年）四四—四五頁。楊幼瑛「我所知道的日本共産党華僑支部的誕生」前掲北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会二〇年》編輯部編『中国留日同学総会二〇年』五九—六二頁。同学総会元主席郭平坦氏へのインタビュー（二〇一五年六月、北京）。
(42) 前掲「日本共産党華僑留学生支部的誕生」四四—四五頁。
(43) 前掲王雪萍「在日中国人メディアが記録した留日学生の思想の変化——中国留日同学総会の機関紙『中国留日学生報』（一九四七—一九四九）を手がかりに」二一—三八頁。
(44) 王毓声「従覚醒到堅定愛国」前掲北京日本帰僑聯誼会《中国留日同学総会二〇年》編輯部編『中国留日同学総会二〇年』二八—二九頁。
(45) 李記者「全体代表大会召開　同学総会范琦主席就任第一声」、「新年度の執行部成る　三十日、会員大会開かる」『中華民国留日学生旬報』一九四七年三月三〇日。『中華民国留日学生名簿』（中華民国留日学生同学総会、一九四六年九月一日）一、一〇、三七頁。「前途に明るい希望と叡智　危機突破強力執行部成る　范琦主席留任・郭、羅両氏出馬」『中華留日学生報』一九四七年一〇月一五日。
(46) 「同学会だより」『中華留日学生報』一九四七年五月一五日。前掲『中華民国留日学生名簿』三四、四六、八二頁。前掲呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史——呉修竹回想録』五三—五四頁。「前途に明るい希望と叡智　危機突破強力執行部成る　范琦

主席留任・郭、羅両氏出馬」『中華留日学生報』一九四七年一〇月十五日。『学生報』第五号には許燈眞となっているが、これは誤りであるため、『学生報』別の号や複数の回想録に基づき、本章では許燈炎に修正した。

(47) 「同学会だより」『中華留日学生報』一九四七年七月一日。前掲『中華民国留日学生名簿』九―一〇頁。頼中和「為振興中華、祖国統一大業奮闘終生」前掲『回国五十年――建国初期回国旅日華僑留学生文集』三四五―三五一頁。帰国華僑LVへのインタビュー（インタビュー実施者：徐輝）二〇二一年七月二七日。

(48) 前掲「日本共産党華僑留学生支部的誕生」四四―四五頁。林連徳の日共への入党は一九五〇年である（前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』一一二頁）。

(49) 前掲『中華民国留日学生名簿』三三―九八頁。前掲一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』。前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』八三―一二六頁。

(50) 前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』九九―一〇七頁。

(51) 「民主的華僑学生団体同時に誕生　華僑民主促進会　民主中国研究会」『中国留日学生報』一九四八年十二月一日。

(52) 王兆元「同学会半年来の文化活動の回顧とその展望」『中国留日学生報』一九四八年十二月一日。

(53) 楊国光『ある台湾人の軌跡――楊春松とその時代』（露満堂、一九九九年）一四七・一四八頁。なお、華僑民主促進会の活動について本書所収の安井三吉論文に参照されたい。

(54) 元同学総会主席郭平坦氏へのインタビュー、二〇一五年六月一二日、北京。前掲『中華民国留日学生名簿』三三―一一八頁。前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』九八―一一七頁。前掲「日本共産党華僑留学生支部的誕生」四四―四五頁。岡野翔太「戦後日本華僑の「新中国」イメージとそのアイデンティティの可塑性――帝国日本の残照と「我愛我的台湾」――」『現代中国』九一号、二〇一六年九月、八一―一〇一頁。林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』（国史館、二〇〇一年）三五八頁。

(55) 前掲『中華民国留日学生名簿』三―五四頁。前掲林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』三一六頁。

(56) 「よく笑い、よく歌う　王同学総会主席」『中国留日学生報』一九五〇年七月一日。前掲『中華民国留日学生名簿』三三―一二六頁。前掲郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』九八―一一七頁。前掲林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』三三七頁。

(57) 石嘉福・鄧健吾『敦煌への道』（日本放送出版協会、一九七八年）著者紹介。

(58) 前掲一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』。

(59) 前掲日本華僑華人研究会『日本華僑・留学生運動史』七九頁。

(60) 前掲『中華民国留日学生名簿』四二頁。

(61) 「全体会員代表大会報告　妻子にも旅費貸与」『中国留日学生報』一九五三年一月一・一五日合併号。前掲『中華民国留日学生名簿』一二五頁。前掲一高同窓会『昭和二十七年四月十五日現在　会員名簿』。

(62) 元同学総会主席郭平坦へのインタビュー、二〇一五年六月一二日、北京。

(63) 前掲『中華民国留日学生名簿』六五―一二五頁。前掲岡野翔太「戦後日本華僑の「新中国」イメージとそのアイデンティティの可塑性――帝国日本の残照と「我愛我的台湾」」八一―一〇一頁。江重光「組織強化のために――任期中感じたものの中から　組織部」『中国留日学生報』一九五三年一一月二五日。前掲石嘉福・鄧健吾『敦煌への道』著者紹介（同書の著書紹介によると、鄧健吾は一九三一年東京に生まれ、東京芸術大学美術史専攻、中国中央芸術大学卒業後同大学研究員、一九七八年出版時は成城大学文芸学部教授であった）。

(64) 江重光「組織強化のために――任期中感じたものの中から

組織部」『中国留日学生報』一九五三年一一月二五日。前掲林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』三一一頁。

(65) 前掲王雪萍「戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤――救済金問題を事例に」八三―一一九頁。

(66) 「中国留日同学総会会章」『中国留日学生報』一九五三年六月五日。

(67) 郭平坦は一九三三年台南生まれ、一九四一年に家族と共に日本へ移住、日共党員、一九五五年に日共から離党し、早稲田大学大学院中退し、一九五六年に中国大陸へ帰国、一九七三年に中共に入党、中華全国台湾同胞聯誼会副会長、全国人民代表などを歴任し、二〇二二年二月五日に北京にて死去した（同氏へのインタビュー、二〇一五年六月十二日、北京。郭平坦訃報、二〇二二年二月七日）。

(68) 邱茂は一九三四年東京生まれ、父親は台湾出身華僑、母親は日本人である。一九五九年家族と共に帰国、帰国後は天津化工研究所勤務を経て、一九六四年に北京の中央人民広播事業局日語組に異動、その後中央馬列編訳局に異動した（同氏長男の邱琳（北京在住）へのオンラインインタビュー、二〇二二年四月二八日）。

(69) 陳栄照は台湾雲林県出身で、一二歳に台湾から日本へ留学した（同氏親族への電話インタビュー、二〇二三年四月一一日）。

(70) 前掲『中華民国留日学生名簿』一〇八頁に、翁国灶は一九四六年当時二〇歳で龍谷大学専門学校に在籍と記されている。ただし、出身地に関する部分は判読できない状態であった。郭平坦「為中日恢復邦交而奉献的台湾同胞――紀念中日邦交正常化四十周年」『台声』二〇一二年七月五日、七〇―七三頁。前掲林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』三三三頁。

(71) 陳清源「華僑運動大会開かる」『中国留日学生報』一九五三年一〇月十五日。前掲『中華民国留日学生名簿』三五―一二九頁。『聯絡員用在京日本帰僑僑眷通訊録』（北京日本帰僑聯議会編印、二〇〇七年一〇月一一日修改版）。『北京和各地的日本帰僑通訊録』（京日本帰僑聯議会編印、二〇〇三年九月）。韓慶愈「東京華僑総会の選挙に際して」『中国留日学生報』一九五三年四月一〇日。前掲林清芬『臺灣戦後初期留學教育史料彙編第一冊　留學日本事務〈一〉』（国史館、二〇〇一年）三一一―三三六頁。

(72) 元同学総会主席郭平坦へのインタビュー、二〇一五年六月一二日、北京。

(73) 凌憲民「組織強化に関連して――帰国同学からの批判に答える」『中国留日学生報』一九五三年十二月十五日。何乃昌「国語専頁」『中国留日学生報』一九五六年十二月一日。

(74) 陳学全は東京生まれ、父親が大陸出身の華僑二世であり、同学総会の活動に参加した後、華僑総会の活動にも携わった。陳が参加した当時の同学総会の会員には日共党員が少なくなかったが、廖承志による中国人日共党員の離党要求を受け、日共には入党しなかったという（大里浩秋「一九五〇、六〇年代の中国留日同学会と華僑社会――陳学全さんに聞く」孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（東方書店、二〇一九年）三一三―三四五頁）。

(75) 「第十六届全体会員代表大会　新路線を確立、盛大裏に終る」十一月二十八・二十九両日東京で」『中国留日学生報』一九五三年十二月十五日。呂永和「迎接学習祖国的高潮」『中国留日学生報』一九五三年十二月十五日。

(76) 劉俊南「学習と文化活動に重点――こつこつと忍耐強く」『中国留日学生報』一九五四年六月二五日。

(77) 在日華僑の子弟を留学生と見做すことには最後まで逡巡した。しかし、本章に取り上げた在日華僑出身の高校生や大学生は当時、中国の国籍を保持していたうえ、同学総会の会員になることで中国政府による留日学生向けの救済金を受給できる資格を得られた。こうした特殊事情により、大陸及び台湾出身の留日学生と同学総会の会員としての地位は同等であったことを考慮し、本章では、同学総会会員である在日華僑子弟の高校生と大学生も「留

日学生」と表記した。

(78)「陳立清文庫」のための遺族による「陳立清紹介」（http://www.wang-xueping.com/chenprofile.pdf　二〇一二年五月六日アクセス）。

(79)前掲劉俊南「学習と文化活動に重点――こつこつと忍耐強く」。

(80)「会員の横顔　〝ふく〟の好きな男　いけるのはさけだけではない　陳清源」『中国留日学生報』一九五五年九月一日。

(81)前掲郭平坦「為中日恢復邦交而奉献的台湾同胞――紀念中日邦交正常化四十周年」『台声』二〇一二年七月五日、七〇―七三頁。

(82)荒川雪「在日中国人メディアが記録した留日学生をめぐる国府と人民政府の争奪――中国留日同学総会機関紙『中国留日学生報』（一九五〇―一九五七年）を手がかりに」『人文学研究所報』（神奈川大学人文学研究所）No.67、二〇一二年三月、一六九―一九〇頁。

(83)元同学総会主席郭平坦へのインタビュー、二〇一五年六月一二日、北京。

(84)郭平坦「為中日恢復邦交而奉献的台湾同胞――紀念中日邦交正常化四十周年」『台声』二〇一二年七月五日、七〇―七三頁。

(85)元同学総会主席郭平坦へのインタビュー、二〇一五年六月一二日、北京。

(86)「第一九届会員代表大会　民族的自覚と誇りを高揚　学習を通して組織を強大拡大」『中国留日学生報』一九五五年九月一日。

(87)前掲『中華民国留日学生名簿』三六頁。

(88)立「会員の横顔　哲学趣味の巨像　陳明新」『中国留日学生報』一九五六年二月一日。

(89)沈健生「九州関西同学会訪問記」『中国留日学生報』一九五六年六月十五日。

(90)「第二一届全体会員代表大会　学習第一主義　委員の社会活動を制限」『中国留日学生報』一九五六年九月一日。

(91)「会員の横顔　ソプラノの薬学士さま　呉瑛香」『中国留日学生報』一九五六年五月十五日。

(92)前掲「第二一届全体会員代表大会　学習第一主義　委員の社会活動を制限」。

(93)前掲「第二一届全体会員代表大会　学習第一主義　委員の社会活動を制限」。

(94)国「会員の横顔　専門学習強化の本家　楊忠銀同学の巻」『中国留日学生報』一九五七年五月一日。

(95)学全「会員の横顔　むっつり右門　スポーツ万能選手　石嘉福」『中国留日学生報』一九五七年四月一日。

(96)「会員訪問　ユーモアのかたまり　王万海同学の巻」『中国留日学生報』一九五七年七月一日。

(97)王雪萍「留日学生の選択――〈愛国〉と〈歴史〉」、前掲劉傑・川島真編『一九四五年の歴史認識――〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』二〇三―二三二頁。

(98)留日華僑韓慶愈へのインタビュー、二〇〇七年十二月一〇日、東京。

(99)留日華僑留学生聯議会元秘書長曾葆盛へのインタビュー、二〇〇七年十一月二三日、北京。

(100)荒川雪「在日中国人メディアが記録した留日学生をめぐる国府と人民政府の争奪――中国留日同学総会機関紙『中国留日学生報』（一九五〇―一九五七年）を手がかりに」『人文学研究所報』（神奈川大学人文学研究所）No.67、二〇一二年三月、一六九―一九〇頁。元同学総会主席郭平坦へのインタビュー、二〇一五年六月十二日、北京。前掲「日本共産党華僑留学生支部的誕生」四四―四五頁。

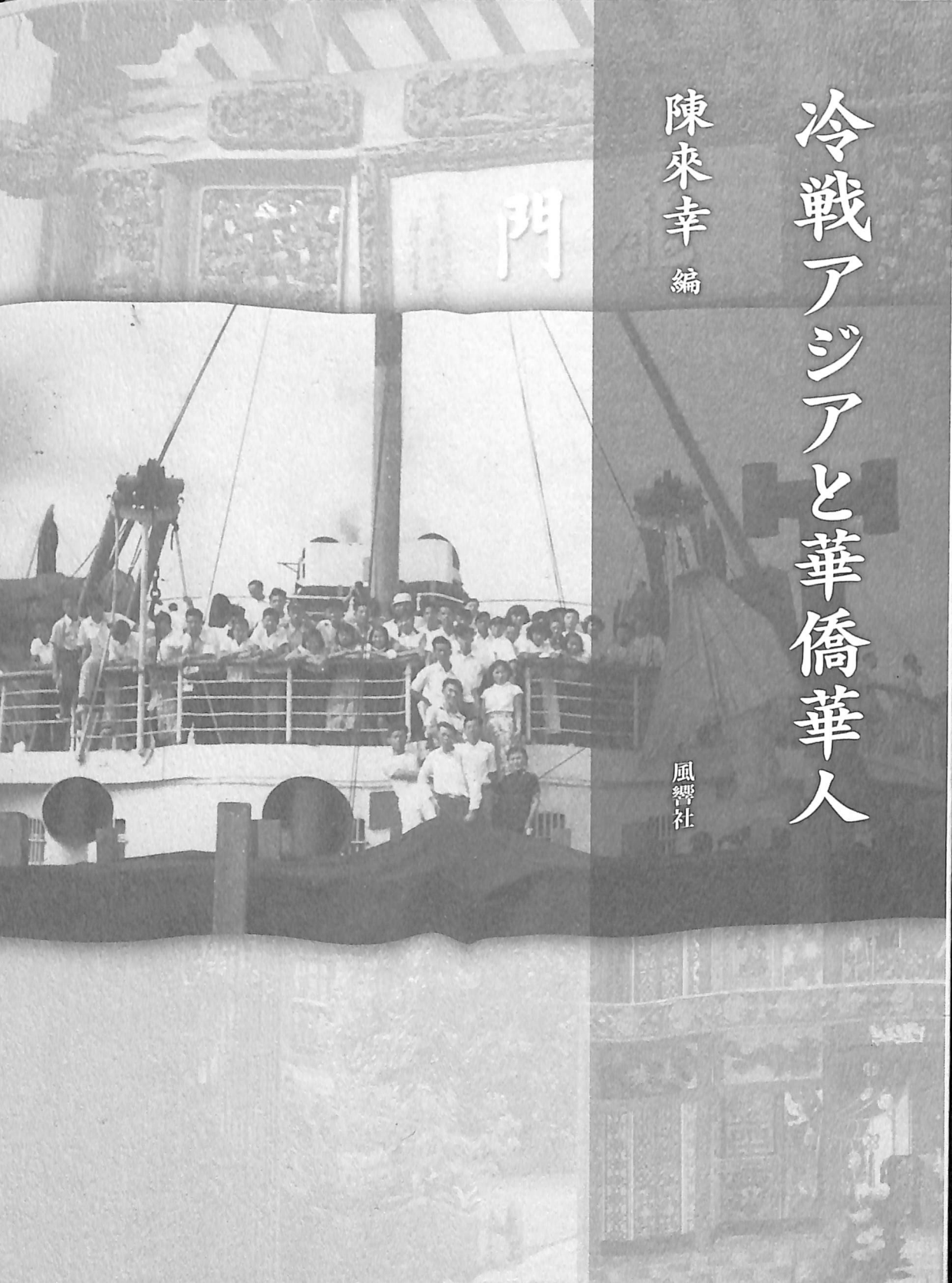
編者紹介
陳 來幸（ちん　らいこう　CHEN Laixing）
1956年神戸生まれ。
1986年神戸大学大学院文化学研究科博士課程単位取得満期退学。博士（文学）。
専攻は歴史学、華僑華人研究。
現在、ノートルダム清心女子大学教授。兵庫県立大学名誉教授。
主な業績として、『近代中国の総商会制度：繋がる華人の世界』（京都大学学術出版会、2016年）、『交錯する台湾認識：見え隠れする「国家」と「人びと」』（勉誠出版、共編、2017年）、中華会館編『落地生根：神戸華僑と神阪中華会館の百年』（研文出版、共著、2000年）など。

冷戦アジアと華僑華人

2023年3月15日　印刷
2023年3月25日　発行

編　者　陳　來幸
発行者　石井　雅
発行所　株式会社　風響社
東京都北区田端4-14-9（〒114-0014）
TEL 03(3828)9249　振替 00110-0-553554
印刷　モリモト印刷

Printed in Japan 2023 © CHEN Laixing et al.
ISBN978-4-89489-338-2 C3022



冷戦アジアと華僑華人

陳來幸 編

風響社